

ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの 刹那滅論証批判

——その批判の対象と批判の論点——

酒 井 真 道

1. 問題の所在と本稿の目的

仏教の刹那滅説は 13 世紀初頭にインド仏教が衰亡を迎えるまで仏教徒と非仏教徒との間の論争の一大トピックであり続けた。仏教側ではジュニャーナシュリーミトラ (=Jñ) やラトナキールティ (=RK) が、非仏教側ではウダヤナが、その論争の最終局面を伝えるが、刹那滅説の証明方法が確立され、ある程度固定化されるダルマキールティ (=DhK) 以降、彼らの時代に至るまでの間の論争史には不明な点も少なくない。特に 9 世紀から 11 世紀前半までの約 2 世紀間は、刹那滅説を巡る論争史研究の空白期間となっている。

DhK の刹那滅論証に対し体系的な批判を展開した最初のバラモン教系思想家はニヤーヤ学派のシャンカラスヴァーミン (=ŚS) (ca. 720/730-780/790) と見なされるが¹⁾、彼の著作は現存しない²⁾。ŚS 以降で、最初に思想史に登場する反刹那滅論者で、その著作が現存する思想家は、ヴァイシェーシカ学派のヴィヨーマシヴァ (=VŚ) (900 年頃)³⁾ であろう。年代的に重要な位置にあるにもかかわらず、彼の刹那滅論批判は、筆者の知る限り、これまで十分に引き上げられてこなかった。このような状況に鑑み、本稿では、刹那滅説を巡る論争史研究の空白期間を埋める目的で、VŚ の刹那滅論批判を考察する。特に本稿は、論証因を存在性 (*sattva*) とする、*sattvānumāna* (=SA) と呼ばれる、刹那滅説の推理形式に対する彼の論理学上の批判に焦点を合わせ、彼の対論者説を吟味し、そして、対論者説を論駁する彼の論点を考察する。これにより、VŚ の時代における論争の具体的な状況を明らかにするのが本稿の目的である。また更に本稿では、論争の状況をより詳細に把握する目的で、VŚ に後続するシュリーダラ (=ŚDh) (10 世紀後半頃) の *Nyāyakandali* における議論も、彼の対論者説の内容分析を中心に、併せて検討したい。

(68) ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの刹那滅論証批判 (酒井)

2. VS の対論者説の吟味

VS が紹介する仏教説で特徴的なのは、いわゆる *viparyaye bādhakapramāna* (所証属性の矛盾概念の領域に論証因が起こることを否定する正しい認識 = VBP) の使用方法である。彼の対論者は、非瞬間的なものが、継時的な仕方でも瞬時的な仕方でも目的実現を為しえないことを証明した後に、以下のようにその SA を結論付ける。

[対論者:] それゆえ、このように、非瞬間的な諸々のものに起らない目的実現は、[目的実現それ] 自身によって遍充されている存在性を把捉して、[非瞬間的な諸々のものに] 起らない。というわけで、非瞬間的な諸々のものは非存在である。それゆえに、このような仕方でも、否定するもの (= VBP) が知られることを根拠に、他ならぬ主題において (*pakṣa eva*)、非瞬間的ではないのかという疑いの排除が実現する場合、存在性こそが瞬間的であるものを証明するものである⁴⁾。

対論者は、他ならぬ主題において、VBP により、その主題が非瞬間的ではないのかという疑惑の排除⁵⁾ が実現する場合、存在性が瞬間性を証明する論証因となる、と述べる。ここで主張される、VBP の、主題への直接的な使用⁶⁾ は、後代モークシャーカラグプタ (= MK) が、「内遍充の立場」(*antarvyāptipakṣa*) として説示するもの⁷⁾ と内容的に等しい。この見解に対し VS は、以下に見る SA 批判の中で、主題に対し VBP を適用するのは不適切だと論駁する。

3. VS の SA 批判

SA に対する VS の論理学上の批判は三つの論点からなされる。第一の論点は因の第三相、第二は因の第一相、そして第三は因の第二相および第三相、である。その三点の何れも、VBP を主題に用いるという主張に、直接的あるいは間接的に関わっている。

3.1. 因の第三相 (否定的随伴) に関して

まず、VS は、非瞬間的なものでも共働因に依存して継時的或いは瞬時的に目的実現を為すことが可能であるとし、存在性が否定的随伴を欠くことを指摘する。

次に、彼は VBP を主題に用いることの不適切さを指摘する。ここでの主題とは、論証因である存在性が存在するものであり、それについて瞬間性が肯定的に証明されなければならないものである。一方、VBP は非瞬間的なものについてそれが非存在であることを、つまり否定的随伴を証明するものである。すなわち、非瞬間的なものに用いられるべきこの VBP を、主題に用いることは不適切である。

この指摘に対し仏教徒は、「非瞬間性」と、目的実現に関する「継時性・瞬時性」との矛盾を根拠に VBP が、主題について、非瞬間的ではないのかという疑惑を排除する場合、VBP が瞬間性を証明する、と主張するかもしれないが、これも棄却される。矛盾の理解は、矛盾する二つのものの存在を前提とするが、この論証の場合、仏教徒はその一方である非瞬間的なものの存在を認めていないからである。そして、もし矛盾が理解されるとするならば、非瞬間的なものは、矛盾についての理解を人に生ぜしめることになる。このことは、非瞬間的なものが認識を生ぜしめるという目的実現能力をもっていることに他ならない。よって、非瞬間的なものでも、目的実現を為すのであるから、否定的随伴は成り立たない⁸⁾。この批判の論法は ŚS の説を継承したものと理解できる⁹⁾。

3.2. 論証因の第一相 (主題所属性) に関して

次に VS は論証因それ自体のステータスについて批判する。仏教徒からの直前の主張にあったように、VBP が主題において瞬間性を証明するものであるならば、一体、存在性という論証因の役割は何か。存在性という論証因は無意味である。これに対し仏教徒は、根本にある (*maulya*) 存在性、すなわち主題にある、つまり主題に限定された存在性——独自相とも言うべきか——によって、主題の瞬間性が証明される、と主張するかもしれない。その場合、その瞬間性は、共通相ではなく独自相レベルのものであるから、その瞬間性は推理によって決定されるべきものであるとは言えない¹⁰⁾。

3.3. 因の第二相および三相に関して

最後に、肯定的随伴・否定的随伴双方の観点から存在性という論証因の過失を指摘し、VS は SA 批判を締めくくる。

[VS:] そして、「存在性のゆえに」という論証因にとって、[所証属性を] 理解させるものであるという性質は、諸同類・諸異類との肯定的随伴・否定的随伴なしには、規則に沿わない。なぜならば、[さもなければ、] 不共 [の属性] さえも [所証属性を] 理解させるものであるという性質をもつという不都合な帰結があるから。実に一切のものが主題の中に含まれるのだから、同類・異類がまったく存在しない。主題などの分立は概念構想によって虚構されたものであるのだから、概念構想によって虚構された同類において肯定的随伴があり、それ (= 概念構想) によって虚構されたものに他ならない異類において否定的随伴がある、と考えて、[[存在性のゆえに] という論証因に所証属性を] 理解させるものであるという性質があるならば、然らば、このようにして、推理は、概念構想によって虚構された、主題などの分立に依存している [のだから] でっちあげられたものである。従って、他ならぬ瞬間性は虚偽に違いない¹¹⁾。

(70) ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの刹那滅論証批判 (酒 井)

VŚ は、SA では一切が主題に含められるから同類も異類も全く存在せず、それゆえ、論証因は不共不定の過失を犯していると言う。これに対して仏教徒は、事実としては「全て」が主題であるが、概念構想によって、主題、同類、異類が虚構されることで、不共不定の過失は回避される、と主張するかもしれない。しかし、そのような虚構に基づく推理は、でっちあげられたものに過ぎず、でっちあげられた推理によって証明された瞬間性は虚偽に他ならない。

ここで批判される、SA の主題が「一切」であるという見解は、アルチャタ (= Ar) にトレースできる。更にまた、その説に対し、この論証因が不共不定であると指摘したのは、論争史の上では恐らく VŚ が最初であろう¹²⁾。

Ar は Hetubinduṭkā において、1) 存在性という論証因を用いて一切のものに瞬間性が行き渡っていることを証明しようとする者には同類は存在しない、2) 知覚によって瞬間性は知られないから喩例となりうる瞬間的なものを提出することはできない、という二つの理由から、因の第二相は構想上のものであり、実在の力 (*vastubala*) に由来するものではない、と述べている¹³⁾。つまり Ar は、実在の力という観点から見れば、因の第二相は虚構であり、あくまで形式上保持されるべきものに過ぎないと理解している¹⁴⁾。VŚ は、この点を踏まえた上で批判を加え、因の三相説が虚構であるならば、SA で論証される所証属性そのものが虚構であると批判していると考えられる。

また、SA においては「一切」が主題に含まれ、同類も異類も存在しない、という記述から、VŚ の対論者が、VBP を主題に直接用いるという立場に立っている理由が理解できる。対論者にはすべてが主題だからである。

3.4. 小結

以上の考察から VŚ は、後代の仏教徒 MK よって「内遍充」と名づけられる立場を取る仏教徒を相手に、その論理の種々の過失を因の三相説の観点から指摘していることが分かる。

4. ŚDh の SA 批判

Nyāyakandalī において ŚDh が対峙する対論者説は、大枠では VŚ が対峙したそれと軌を一にしている。そして、それを論駁する ŚDh の批判の論点もまた、基本的には VŚ のそれに準じている。ただし、論争中に ŚDh が「*iti cet*」節によって適宜挿入する仏教徒からの反論は豊富であり、それゆえ ŚDh の批判は VŚ のそれよりも広範囲にわたり、また意を尽くしたものとなっている。就中、以下に見る、

対論者によって、1) SA の論証式が提示される点、2) 論証因が無意味であるという指摘を回避するために、種々の説が提示されている点、この二点が、当時の論争状況を知る上で重要である。

4.1. SA の論証式

ŚDh の対論者は、主題を十二処とし、喩例をもたない特徴的な論証式を提出する。

[対論者:] それゆえに、このように、能遍である継時性と瞬時性が〔非瞬間的なものにおいて〕知覚されないことに基づいて、非瞬間的なものに起こらない存在性は瞬間的なものに落ち着く。そして、そのようであるなら、瞬間性の推理は容易に得られる。「およそ存在するもの、それは瞬間的である。そして、十二処は存在する。」と¹⁵⁾。

註釈者ナラチャンドラスーリはこの論証式に以下のような註釈を施し、論証式が喩例をもたないことの理由を説明している。

五つの感官、声等を始めとする五つの対象、意、法処 [がある]。そして、これらが十二処である。[この「存在性」という論証因は] 内遍充をもつものだから、喩例はない¹⁶⁾。

筆者の知る限り、SA の論証式で主題を十二処とするものは、この Nyāyakandaḥi のもののみであるが、この論証式が喩例をもたないことは注目に値する。

4.2. 論証因の無意味性に対する仏教徒の諸見解

VBP により主題の瞬間性が証明されるならば論証因は無意味だという VS の指摘は、Nyāyakandaḥi ではより詳細に追究されている。その際、論証因の有益性、つまり因の第一相の必要性を主張する対論者説として以下の①から③の立場が順番に挙げられる¹⁷⁾。

①主題において遍充の普遍的な——個物を考慮しない——把握がある。個物において存在性は論証因性をもつ。

②VBP に基づいては、非瞬間性の排除と非存在性の排除との間の遍充が把握される。他方、存在性に基づいては、実在を本性とする瞬間性の理解がある。

③ダルモータラ (=DhU) によって、「喩例である壺において VBP によって遍充を証明した上で、主題である音声において、存在性に基づいて、瞬間性が証明される。従って、双方ともに有意義である。対象が異なるのだから。」と言われている。

このうち①における遍充把握の立場は、ジャヤンタバッタが Nyāyamañjarī の中で、その理論を仏教徒に帰すところの「内遍充」(antaryyāpti) と呼ぶもの¹⁸⁾ に内容的に相当する。②については、筆者は現時点では仏教側の文献に同じ説を見出

(72) ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの刹那滅論証批判 (酒 井)

せていない。③については、内容から判断する限り、DhUの説と完全に同定するのは難しいように思われる。筆者が知る限り、DhUは主題に対しても、喩例に対しても、VBPを用いてその瞬間性を証明するという立場を取っているからである。ただし、DhUは、遍充の把握と主題所属性の確定は別々の異なった正しい認識——前者はVBP、後者は直接知覚——によるという立場を取っている¹⁹⁾ので、その点では、「対象が異なるのだから」というŚDhの言及は、DhU説に合致する。内容的に③の立場に完全に一致するのは、RKがCitrādvaitaparakāśavādaにおいて「外遍充の立場」(*bahirvyāptipakṣa*)とするもの²⁰⁾である。

これら①から③までの説すべてを斥けてŚDhはSAに対する論理学上の批判を締めくくるが、対論者説の最後のオルタナティブとして一転して「外遍充」の理論が持ち出されている点が当時の論争状況を考える上で重要であると思われる。

5. 考察——結論に代えて——

以上から分かるのは、10世紀に属するVŚもŚDhも、後代の仏教徒MKが「内遍充」と呼ぶ立場——他ならぬ主題にVBPを用いて遍充を把握する、つまり所証属性を証明する——を取る対論者に対し、その立場と因の三相説とが相容れないということを批判しているということである。そして、それに対し、対論者側も幾つかの見解を出していた²¹⁾。そして、Vyomavatī, Nyāyakandalī両著作での議論の展開を追う限り、SAという推理において仏教徒には内遍充と外遍充の立場があり、内遍充が支配的で、外遍充は主流ではなかったように見える。

本稿で考察した対論は、ラトナーカラシャーンティ(ca. 970–1030)がAntarvyāpti-samarthanaを著すに至るまでの思想史の流れと状況とを良く物語っている。思想的にはAntarvyāptisamarthanaは、VŚとŚDhの対論者が行っていた内遍充の擁護・正当化(samarthana)の営み(但し、VBPを喩例としての基体に用いるという点で上記の③の立場は除かれる)の延長線上に位置づけられるべき作品である。

1) Cf. Steinkellner 1977. 2) HBṬĀやKBhA, KBhS等に引用される彼の所説断片はSteinkellner 1963を参照。Steinkellner 1977は、ŚSの説は以降のニヤーヤ学派の諸論師による、DhKの刹那滅論証批判の出発点になったとする。本稿で取り上げるVŚの刹那滅論証批判の中にも、彼に帰される説が見出される。Schmithausen 1965: 248, 254は、錯誤知をめぐる議論に関し、VŚが依拠する人物がŚSである可能性について示唆するが、刹那滅説批判の文脈でVŚはŚSに依拠している。3) VŚの年代は、Slaje 1986に従う。4) Vyom^G 140,23–25 (Vyom^{Ms} 88b8–88b9; Vyom^{Ch} 396,20–22). G 140,24: *parapakṣa evā°*; Ch 396,21: *pakṣapakṣa evā°*をMs 88b9: *pakṣa evā°*とする。5) 推理の疑惑排除

ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの刹那滅論証批判 (酒井) (73)

機能については Kellner 2004 を参照。 6) VBP の、主題への直接的な使用はバーサルヴァジュニヤの対論者によっても主張される。 Cf. NBhūṣ 511,16-18。 7) Cf. TBh 47,1-6,9-13. MK によれば、喩例基体において帰謬と帰謬還元という二つの正しい認識によって遍充を把握する立場 (Kajiyama 1998: 111-112 では Jñ と RK に帰される) が外遍充論であり、他ならぬ主題において、VBP によって遍充を把握する立場 (Kajiyama 1998: 111-112 ではラトナーカラシャーンティに帰される) が内遍充論である。 8) Vyom^G 142,25-143,5 (Vyom^{Ms} 90a5-8; Vyom^{Ch} 398,15-22) 取意。 G 143,2 (Ch 398,18-19): *bhāvātkaṣa eva* を Ms 90a6: *bādhakaṃ pakṣa eva* とする。 G 143,3: *bādhaka*; Ch 398,19: *bādhakam*; Ms 90a7: *bādhanam* を *sādhanam* に修正する。 9) Cf. HBṬĀ 370,17-19 (cf. Steinkellner 1963: 7-8); KBhA 87,1-4 (cf. Steinkellner 1963: 8) (≈ KBhS 87,11-13)。この論法はバーサルヴァジュニヤにも引き継がれる。 Cf. NBhūṣ 511,20-25。 10) Vyom^G 143,5-8 (Vyom^{Ms} 90a8-9; Vyom^{Ch} 398,22-26) 取意。 G 143,7 (Ch 398,24): *maulena* を Ms 90a8: *maulyena* とする。 G 143,7 (Ch 398,25): *°lakṣaṇādibhinnaṃ* を Ms 90a8: *°lakṣaṇād abhi{m}nnaṃ* とする。 11) Vyom^G 143,9-13 (Vyom^{Ms} 90a9-90b3; Vyom^{Ch} 398,26-399,1)。 G 143,9 (Ch 398,26-27): *anvayavyatirekābhyām antareṇa*; Ms 90a9-90b1: *anvayavyatirekān antareṇa* を *anvayavyatirekān antareṇa* に修正する。 12) Kyuma 2007 は SA の主題を「一切の事物」とした最初の仏教徒を Jñ とし、SA の論証因が不共不定であると批判した最初の思想家として Nyāyasāra の註釈者ヴァースデーヴァを挙げる。これに対し筆者は、Ar は SA の主題として一切の事物を想定していたのではないかと理解している (cf. Sakai 2015)。また、不共不定の過失の指摘は、少なくとも VS までは遡れると思われる。 13) Ar の議論については Sakai 2015 を参照。 14) 遍充は実在の力に拠るのであり主題・同類の区別とは無関係であるという主張は Vipañcītārthā にも見られる (cf. Bhattacharya 1986: 99)。この「実在の力」が、存在論的事実を意味するならば、事実としては、世界は、所証属性をもつものの集合と、もたないものの集合とに二分されるので、所証属性をもつものの集合を、主題と同類とに区分して考えることは概念構想による業となる。Ar はこれゆえ因の第二相を虚構と理解するが、彼以外の論師たちが、これを虚構とまで考えていたかどうかは不明。主題と同類の峻別をめぐる、認識論的視点と存在論的視点については桂 2003: 23-26 を参照。 15) NK 187,5-7。 16) NKṬ 187,3-5。 17) ①NK 192,3-4; ②NK 192,6-7; ③NK 193,3-4 (NK 193,3: *yadapktayum* を *yadapyuktam* に修正する)。 18) Cf. NMI 102,23-24. Bhattacharya 1991: 1 (with n. 3) はこの部分を内遍充の定義と見なし注意を喚起している。 19) Cf. 酒井 2013, Sakai, forthcoming。 20) Cf. CAPV 130,27-29 (cf. 御牧 1984: 220)。 21) 主題における瞬間性の証明に VBP を用いつつも、因の三相の意義を確保するという取り組みは DhU に顕著に見ることができる。 Cf. Sakai, forthcoming。

〈文献と略号〉

CAPV = Citrādvaitaprakāśavāda. Ed. A. Thakur. In *Ratnakīrtinibandhāvali (Buddhist Nyāya Works of Ratnakīrti)*. Patna, ²1975: 129-144. HBṬĀ = Hetubinduṭīkāloka. Ed. Sukhlalji Sanghavi and Mini Shri Jinavijayaji. Baroda, 1949. KBhA = Kṣaṇabhaṅgādhyāya. Ed. A. Thakur. In *Jñānaśrīmitranibandhāvali (Buddhist Philosophical Works of Jñānaśrīmitra)*. Patna,

(74) ヴィヨーマシヴァとシュリーダラの刹那滅論証批判 (酒井)

²1987: 1–159. **KBhS** = Kṣaṇabhaṅgasiddhi. Ed. A. Thakur. In *Ratnakīrtinibandhāvali (Buddhist Nyāya Works of Ratnakīrti)*. Patna, ²1975: 67–95. **NBhūṣ** = Nyāyabhūṣaṇa. Ed. Svāmī Yogīndrānanda. Vārāṇasī, 1968. **NK** = Nyāyakandalī. Ed. J. S. Jetly and Vasant J. Parikh. Vadodara, 1991. **NKṬ** = Nyāyakandalīṭippaṇa. Ed. J. S. Jetly and Vasant J. Parikh. In NK. **NMI** = Nyāyamañjarī. Ed. Surya Nārāyana Śukla. Benares, 1936. **TBh** = Tarkabhāṣā. Ed. H. R. Rangaswami Iyengar. Mysore, 1952. **Vyom^G** = Vyomavatī. Ed. Gaurinath Sastri. Varanasi, 1983. **Vyom^{Ch}** = Vyomavatī. Ed. Gopinath Kaviraj and Dhundhiraj Shastri. Benares, 1924–1931. **Vyom^{Ms}** = Sanskrit manuscript of the Vyomavatī. University of Mysore. Oriental Research Institute. Film no. N-2756, Ms no. C-1575. **Bhattacharya, Kamaleswar**. 1986. “Some Thoughts on *antarvyāpti*, *bahirvyāpti*, and *trairūpya*.” In *Buddhist Logic and Epistemology: Studies in the Buddhist Analysis of Inference and Language*, ed. B. K. Matilal and R. D. Evans, 89–105. Dordrecht. **Bhattacharya, Kamaleswar**. 1991. “Marginal Notes on *antarvyāpti*.” In *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition: Proceedings of the Second International Dharmakīrti Conference Vienna, June 11–16, 1989*, ed. E. Steinkellner, 1–2. Wien. **Kajiyama, Yuichi**. 1998. *An Introduction to Buddhist Philosophy: An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta; Reprint with Corrections in the Author’s Hand*. Wien. 桂紹隆 2003 「デイグナーガ論理学における pakṣa, sapakṣa, asapakṣa の意味」『印度哲学仏教学』18: 20–33. **Kellner, Birgit**. 2004. “Why Infer and Not Just Look? Dharmakīrti on the Psychology of Inferential Processes.” In *The Role of the Example (dṛṣṭānta) in Classical Indian Logic*, ed. Sh. Katsura and E. Steinkellner, 1–51. Wien. **Kyuma, Taiken**. 2007. “Marginalia on the Subject of *sattvānumāna*.” In *Pramāṇakīrtiḥ Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, ed. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much, and H. Tauscher, part 1, 469–482. Wien. 御牧克己 1984 「刹那滅論証」平川彰・高崎直道・梶山雄一編『講座大乘仏教 9 認識論と論理学』春秋社, 217–254. 酒井真道 2013 「ダルモータラの刹那滅論研究—*sattvānumāna* における論証因——存在性 (*sattva*) ——成立の問題—」『インド哲学仏教学研究』20: 77–93. **Sakai, Masamichi**. 2015. “Arcaṭa on *dṛṣṭānta*, *trairūpya*, and *viparyaye bādhakapramāṇa* in Dharmakīrti’s *sattvānumāna*.”『南アジア古典学』10: 281–296. **Sakai, Masamichi**. Forthcoming. “Dharmottara on the *viparyaye bādhakapramāṇa* and *trairūpya* in Dharmakīrti’s *sattvānumāna*” (to be published in the Proceedings of the Fifth International Dharmakīrti Conference). **Schmithausen, Lambert**. 1965. *Maṇḍanamisra’s Vibhramavivekaḥ: Mit Einer Studie zur Entwicklung der indischen Irrtumslehre*. Wien. **Slaje, Walter**. 1986. “Untersuchungen zur Chronologie einiger Nyāya-Philosophen.” *Studien zur Indologie und Iranistik* 11/12: 245 – 278. **Steinkellner, Ernst**. 1963. *Augenblicklichkeitsbeweis und Gottesbeweis bei Śaṅkarasvāmin*. Wien (unpublished dissertation). **Steinkellner, Ernst**. 1977. “On the Date and Works of the Naiyāyika Śaṅkarasvāmin.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 21: 213–218.

〈キーワード〉 *sattvānumāna*, *viparyaye bādhakapramāṇa*, 内遍充, 外遍充, 因の三相
(関西大学准教授, Dr.phil.)